【03-C3-001】　アスペルガー症候群と診断された生徒への支援事例（高校１年生Ｓ子）

# 発達障害をもつ生徒への早期対応事例

キーワード：対人関係のトラブル　アスペルガー症候群の理解(1)　保護者への寄り添い方(1)(2)

この事例解説では、入学後まもなく不適応状態を示した、軽度発達障害を持つ生徒への支援についてまとめました。

## 問題の概要

高校１年生のＳ子は、中学時代にアスペルガー症候群と診断されていたが、両親は高校側にはそのことは伝えていなかった。

Ｓ子は、応援歌練習をイヤがり、その間保健室で過ごしていた。また、４月末の高総体地区予選の全校応援前日には体調不良を訴え、早退した。翌日の全校応援を欠席し、以後休みが続いた。

担任が家庭訪問をしたところ、母親から入学以来の人間関係のトラブルによる疲れで登校を渋っていると教えられた。

担任は帰校後、学年長、教育相談係、養護教諭と支援会議をもった。その中で、Ｓ子は、この１ヶ月間、苦戦しながらも一生懸命新しい環境に適応しようしていた。しかしここにきて我慢の限界になったというアセスメントをした。

当面、本人には応援歌練習の時のかかわりを生かして、養護教諭が保健室で対応し、担任は保護者と連携を図ることにした。

## 対応の概要

### ◆　職員間の共通理解から始めた

高校側では、入学前に本人及び保護者と面談をしていました。その際、保護者からは、Ｓ子の発達障害に関する情報は伝えられず、「神経質で、感受性が強く、友人の言動に敏感な子」というようなことを話すにとどまっていました。中学校側からは、中学校訪問の折、軽度発達障害の診断を受けていることが伝えられました。

５月に職員研修会を持ち、養護教諭を講師に、軽度発達障害について学習会しました。また、学年会では、中学校訪問時の情報やアドバイスを基に、当面の対応を具体的に話し合いました。

まずはみんなで注意深く観察し、①「**新しい環境でのＳ子の苦戦場面を知ること**」②「**Ｓ子とのリレーションづくりに有効な方法をつかむこと**」を確認しました。

### ◆　苦戦状況の理解と対応を話し合った

４月末のＳ子の欠席及び家庭訪問を契機に、教育相談担当者がコーディネーターとなって支援会議を開きました。この１ヶ月間の生活状況から、Ｓ子の苦戦状況について次のように**アセスメント**しました。

部活動で、先輩に対して同級生に対するような口の利き方をしたり、注意に口答えしてトラブルになったり、また級友たちの話しに割り込み、自分勝手な話題で話すため、級友たちから腹を立てられたりして、人間関係で苦戦しているため、情緒不安を引き起こし、登校できなくなった。

そして次のような当面の対応策を考えました。

**① 目標を、「毎日登校する」ことにおく過剰適応にならないように、段階的に学校にいる時間を長くしていく**
**② 登校目標やタイムテーブルを一緒につくり、毎日の行動が事前にわかるようにする**
**③ 上級生や同級生とのトラブルの際、S子の思いと実際の言動の受け止められ方について教えていく**
**④ S子や保護者に十分説明し同意を得る**

**このような対応の結果、保護者からの信頼が得られ、S子への支援のめどが立ちました。**

## 実践のポイント

### ① 正しい知識の共有から始める

本事例では、養護教諭を講師に、職員会議を利用して軽度発達障害についての知識を共有することから始めています。こうした知識の共有が、子どもについての共通理解を図る土台として重要になります。

### ② アセスメントを丁寧にする

「アスペルガー症候群のこの子」ではなく「この子のアスペルガー症候群の有り様」をアセスメントします。この子にとって、

**◆どのような場面や、誰との関係の中でどのように苦戦しているのか**
**◆何が、誰が支えになっているか**
**◆うまく適応できているのは、どのような工夫の結果なのか**

など、丁寧に理解していきます。本人や保護者との面談や日頃の観察、日記に書かれていること、心理検査、中学校からの情報などを組み合わせて見立てをし、それをまた面談や観察等で確かめていくわけです。

### ③ 保護者との信頼関係をつくる

保護者からの信頼を得ることは、とくに軽度発達障害児への支援の要になります。この事例の場合、保護者は、当初S子の障害を学校側に言おうとしませんでした。保護者は、我が子の「**健常性」により注目**し、そこを伸ばして欲しいと思います。一方、教師は集団への適応を考えると、**より「障害性」に注目**し、その対処を優先させがちです。両者のこうした違いは、そのままでは大きな溝となり、両者の違和感や不信感に発展していくことが少なくありません。

保護者が障害名を言わないのは、「S子なりに適応してやれることも多くある。それに注目し、大事にかかわって欲しい」という思いなのかもしれません。当初は、むしろ言わないことを尊重し、S子ができていることやちょっとした成長や変化に気づき、それを保護者に伝えることが重要です。

### ④ 二次的障害の予防が大切

軽度発達障害を持つ生徒は、自分のワクが強く、柔軟に対人関係をもつことが難しくなるため、他者と折り合うことが苦手です。その上思春期になると、他の生徒との違いに一層敏感になり、「自分はみんなと違っていて、受け入れられていない。でもどうして違うのかがよくわからない」「どうせ自分が悪いのだ」と思い、ストレスを高め、自己肯定感が低下しがちです。

思春期には、できるだけ挫折感をもたせないようにし、自己肯定感を低下させないことが大切です。